

蒼空の星コルドバの蟻地獄

藤田湘子

鷹会員になった私達に、湘子先生は気前よく短冊や色紙に揮毫して下さった。「自分の師の染筆を一つも持っていないのは可愛そうだから」と常々述べられていた。

今、湘子先生がご存命だったなら、私は迷わずこの蟻地獄の句を所望したはずである。深い意味は無い。

上五と下五の頭韻「あ」の響き。句跨がりなれどリズムの良さ。蒼穹の天と乾いた微小の砂地の対比。絵画のような白い星と赤熱のアンダルシア平原の草叢。そして、白い家並みのコルドバ市街、黄土色の屋根瓦。

俳句を志した私は素十の「蟻地獄松風を聞くばかりなり」を第一と思っていたが、初対面の藤田湘子から「素十はどうだ」と声を掛けられ鷹入会の動機ともなった。